

---

# 一日だけの恋

春色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一日だけの恋

### 【Nコード】

N9506D

### 【作者名】

春色

### 【あらすじ】

花は17歳。今まで、恋愛に関してはほのぼのと日陰で生きてきた。そんな花に、一日だけデートの予定が入った。一日の中に、出会いと別れが詰まった、切なくて懐かしくて暖かい恋のお話。春風とともに、花の気持ちが動いていく。

## ブローグ

花は17歳。

この春で高校の3分の2を終えることになった。ところが、今まで彼氏がいたこともなければ、本気で好きになったこともない。もちろん恋愛偏差値は底辺である。

そんな花にも、メールをしている男子がいた。

たいていは花の友達のことが好きで、その子に対する相談ばかりなのだが、ひとりだけ、友達とは関係ない人がいた。

それは、小学校3年生の時に2つ先の県に転校していった人だった。昔の記憶では、丸い目がきらきらしているかわいい子だった。

名前は、幸山直樹くん。

ひよんなことから、高1の夏メールをするようになり、いまだにそれが続いていた。といって話す話題もないので、一日一通がおきまりで、テスト週間にはいるとぱったり送られてこなくなる。それでも花にはそれが何となく幸せだった。

メールは苦手だったが、ゆっくり考えて、一通を大切に送っていた。

そんな折、突然向こうからこんなメールが入った。

【24日暇？】

―男子に暇？なんて聞かれたことない！

はやる胸を押さえながら返した。

【午前中に終業式があるくらいで、あとは暇だよ。何で？】

早く返事が欲しかったが、やっぱり翌日になってかえってきた。

【その日だけ部活がオフだから、もしかしたらそっちに行けるかも】  
花はほほが熱くなるのを感じた。

一日だけのオフの日を使って、わざわざ遠い町から会いに来てくれるのだ。

それからしばらくの間、花は授業中もそのことばかり考えていた。  
どんな人になってるんだろう？

何で来るの？

あたしに会いに来るんだよね？

教室の窓から見える桜の木は、枝の先につぼみがふくらみかけていた。風は強かったが、細い枝には計り知れないエネルギーが詰まっているようだった。

24日が近づき、またメールが来た。

【24日は絶対いける！これ読んだらすぐ電話して】

花は目を丸くして、電話して、という箇所をもう一度読んだ。

…あたしが!?

かなり焦りながら、あわてて受話器を握り、家族のいない部屋に座り込んだ。

大きく深呼吸して、男子に掛ける初めての電話を、ひとつずつボタンを押した。

ルルルルル…ルルルルル…

カチャ

「…もしもし。」

「もしもし、あの、花です!」

「ああ」

幸山くんの声が聞こえたと思ったら、想像していたよりずっとさわやかな声で、何も言えなくなってしまった。すると、電話越しにくすつと言う笑い声が聞こえた。

「…ひさしぶり。」

「う、うん…ひさしぶり。」ドキドキが最高点に達していたが、聞こったことが少しずつ頭の中に戻ってきた。

「24日、本当に来れるんだよね?」

「ああ」

「何時に着くの?」

「12時半」

「あたしが終業式が終わるのがそれくらいだから、たぶん遅れるけどいい?どうしようか…」

「あ、いいよ?適当にその辺でぶらぶらしとくし。」

「ほんと?じゃあ携帯持っていく…終わったら、電話するから。」

「ああ、分かった。じゃあケー番教えてくれる?」

「うん、あとで送るね。」

会う約束ができると、話すことがなくなってしまった。

また花は沈黙した。

「…じゃあ、おやすみ。」

幸山くんは、優しく言ってくれた。

「うん、おやすみ…。」

電話をした夜、花はなかなか眠りにつけなかった。最近風邪を引いて微熱があったのもあるが、布団の中が異様に熱くて、寝返りをうつてもうつても苦しかった。

体全体が熱くて、もうどうにもならなかった。

まぶたを閉じたまま、熱さと戦った。

しかし、このあと花の恋心が動き出すとはまさか夢にもおもわないのであった。

本人の気づかないところで、春はもう来ていた。

## 1 会う前に

3月24日――

朝起きて、いつもと同じ朝だけどこか違う気がした。寝起きのだるさがなくて、わずかな興奮だけが体に残っている。そうか、今日は幸山くんが会いに来る日なんだ。昨日布団の中で、熱を感じながら眠りに入っただの。

学校は2年生最後の日で、大掃除、終業式、退任・離任式があった。一年間お世話になった教室を大掃除しながら、同じく美化委員の加奈子と騒いだ。花はテンションの調整ができなくてどんなことにも大笑いしていたが、加奈子もなぜかでかい声で話をしていた。

終業式になり、校長先生の長い話が始まった。ためになる話をしているんだろうな…と頭の隅に感じながらも、ぼうつと前を見ていた。

時計の針が10時を指す。

目の悪い花は、もう11時50分なのかと勘違いして焦った。幸山くんの乗ったバスが駅に着くのは12時半。あと40分しかここでの準備をする時間がないとなると困る。

あわてて後ろに立っている加奈子に「今ってもう12時になる?」と確認をした。

すると、加奈子は「は？まだ１０時なんですけど。」とバカにした声で言った。

「あ、そうか、ありがとう。」

「何、どうしたー花？」

「いや、別に」

だが、加奈子も校長先生の話に飽きていたようで、どんどん突っ込んできた。

仕方なく、半になったら小学校のころに転校していった幸山くんが、２つ先の県から会いに来るという話を話した。恋バナが大好きな加奈子は、めがねを輝かせて「写真が欲しい！」とねだった。

「分かった。プリクラを撮ってくる。」

もともと撮るつもりだったので、春休み中に会うときに持っていくことにした。

その話をしてから、加奈子は何かあるたびに時間を言ってきた。

「ほら、今１１時前だよ。１２時になるねー。」とか、

「あー、あと１０分で１２時だよ！」とか。

そして帰る時間になった。

思ったより早く終わって、１２時半には駅につけそうだった。亜矢が教室の前で待っていてくれて、一緒に駅に向かったが、何を話したか覚えていない。

ただ、「どこ行ったらいいと思う？」とアドバイスを仰いでいた気がする。

駅に着く前に、隣の百貨店でカバンをコインロッカーに預けた。  
終業式の日まで残してしまった教科書やブランケットで、カバンは  
重たかったのだ。

そしてトイレに行き、春風でぐしゃぐしゃになったボブを直して、  
いよいよ駅に向かうことになった。亜矢は笑って、楽しそうにして  
いた。

駅では、改札口の前の広い空間に亜矢と立った。

メールでもう着いたことを知らせ、大きな時計が12時35分を指  
しているのを見上げた。バスの予定到着時刻だ。

平日の昼間なので、若い人は制服を着ている人ばかり。  
いくら目の悪い花でも、きつと分かるだろう。

そして、駅の北口から何人か流れてきた。

## 2 再会

その流れの中に、ひとり若そうな男の人がいた。

だが、いざ顔を合わせると怖くなり、なるべくその人の方を見ないようにしてあらぬ方向を探しているふりをした。

すると亜矢が「花、あれじゃないの？」と、花が一生懸命逃げようとしている事態を、あごで示した。もちろん、その人をさして、である。

「え？……そう、かもしれない。」

どうするんだ、あたし、とライフカードを握りたい勢いで、そうつとその人を見た。20メートルほど先なので、顔は分からない。ニット帽をかぶっていて、黒いジャケットにジーンズの細い人だった。

「合ってると思う？」

と、亜矢に尋ねた。

「さあ？」

どうしようと困っていると、向こうも花の方をちらりと見た。そして、もう一度見て、近づいてきた。

亜矢の腕を、「合ってるっぽい。」と引っ張った。

「うん、よかったね。じゃあね。」

亜矢は余裕の笑みを浮かべて、顔の横で柔らかく手を振って身を引いた。

「……久しぶり。」

ついに、幸山くんが話しかけた。帽子をかぶっているから顔の半分しか見えなかったが、昔の記憶のまま、かわいい目をした少年だった。ただ、声変わりをしている、さわやかな落ち着いた声になっていた。

「うん。」花はそういって、笑うしかできなかった。それでも先を続けた。

「お昼食べた？」

「え？いや、まだだけど。」

「なら食べに行く？」

「ああ、どつかあれば。」

「じゃあおすすめのところがあるんだけど。」

最初からここに行こうと決めていたカフェがあった。

かわいいお姉さんふたりが開いている、手作りの小物でふんわりとした印象のカフェだ。

「こっち。」

そう言って、南口の方を指さした。

幸山くんが隣に立って、ふたりで歩き出したときはあまり現実味を感じなかった。

何となく体の奥の奥の方で、心臓がドキドキしているようだった。

人工の川のそばを歩きながら、お母さんは元気？など、互いの親の話をした。

幸山くんのお母さんはあいかわらず、小学校で読み聞かせをしたりするなど精力的に活動しているらしい。

うちの親も相変わらずだよと言ったら、笑ってくれた。

### 3 カフェ

カフェに着くと、窓際の向かい合わせにならなくてすむ席を取った。お客さんはほかに3組くらいで、すべて女性客だった。

「俺、似つかわしくくない？」

「あ、そうかも……。ごめん、こういう場所しか知らないから。」

「いいけど。いい体験になるし。」

その言葉で安心して、持ってきた小学校時代のアルバムを見せた。

小3までの分なら、幸山くんも写っている。懐かしがりながら「俺、このとき太ってたなー。」と興味津々で見てくれた。そのうち、

「何でミートボールって呼ばれてたんだろ？」

と懐かしい話題を振ってきた。

「さあ……。顔が丸かったからじゃん？」

てか、覚えてたんだ……。花にはそのことが感動だった。

でも、絶対太ってなかったけど……。こういうのはぽっちゃりって  
いうんだよ。

そんなことを考えながら、幸山くんが「これは……。くん、こっちは  
。。。だっけ？」と名前を挙げていくのになぜいたり、訂正したり  
した。

メニューはとくに運ばれていたが、注文はまだ取っていなかった。  
指摘すると、「ああ！」と言って、メニューと花の分の水やお手ふ  
きを渡してくれた。

「普段どれを頼むの？」

「うーん、キッシュプレートかな。」

「じゃあ俺もそれにする。」

「それだけでいいの？」

「ああ、バスの中でガム食ってたらおなか結構いっぱい。」

友達と行くときは、たいてい花が注文を取る役だ。

主導権を握るみたいであまり好きではなかったのだが、今回もそうしなくてはいけないのだろうと思って後ろを振り返った。

すると、幸山くんの方から「すいません。」と手を挙げた。

初めてかも…などと、花はそんな小さなことにも驚いた。

店員さんがやってくると、「キッシュプレート2つ。」と言って、

「これだけでいい？」と確認までされた。

「うん。」

キッシュを食べている間、ずっとアルバムを見て語った。

かなり昔のことのはずなのに、案外覚えていたのでたくさん話が出てきた。

お金をかけてわざわざ遠いところを来てもらったので、その勘定は花が出すことにした。最初のうちはもちろん拒否をした。

「いや、俺が勝手に押しかけたんだし！」

それでも、あたしだって来てもらったんだし、それくらいさせてよ。最後は、「ここの割引券持ってる！」と言って見せたら納得していた。

カフェを出たあと、またゆっくり歩いて駅に向かった。

途中、幸山くんが不思議な話題を振ってきた。「俺、目の色が変わったんだよねー。」

「変わった、って？」

「うん、なんか色素が薄くなった感じ。」

「？」

「今、目が緑色っぽいんだ。」

「緑!？」

「見る？」

「うん。」

幸山くんがこっちに顔を向けた。のぞき込むと、本当に薄い緑色をしている。

再会してから、ちゃんと目を合わせたのはこれが最初かもしれなかった。

「ほんとだ……」

幸山くんは笑って、ぱつと前を見た。

あほ……

花も前を見ながら、また奥の方で心臓が動いているのを感じた。

広い交差点に出ると、行きたい方向に横断歩道がなかった。

「渡っちゃうか？」

「えー」

車が通っていて、どちらかが通らなくても反対車線からすぐにやってくる。何回か道路に半分まで出たりして試してみたが、結局タイミングがつかめなかった。

「だめじゃん！こっちの方が早いよ。」

仕方なく、離れたところにある横断歩道を渡った。

## 4 プリクラ

駅に戻り、どこへ行きたいか聞くと「どこでもいいよ」という人任せな答えが返ってきた。

それなら、加奈子との約束を果たしに行こう。

「プリクラ撮らない？」と誘った。

男子は嫌がるものかと思ったけれど、「写真うつるの苦手なんだよね…」といいながらOKしてくれた。

ふたりでプリクラ機に入って、画面に映ったところを見たら、幸山くんがいた。当たり前だが、今さらながら自分似合わないーと思った。こうやって男子とふたりで撮るなんて、100年早い。

すると幸山くんも、「俺普段大勢でしか撮らないから、ふたりで撮るのはどう写ったらいいのかわからない。」と言った。

「普通でいいよ。」

などといいながら、花も分からなかった。

とりあえず、ピースをした。

一枚、アップのプリクラで変なのがとれた。

ふたりともシャッターを押す瞬間に瞬きをして、半目になってしまったのだ。同じように半目になっているから、幸山くんが大爆笑していた。

記念になるかと思って、印刷したい分を選択するときは、真っ先にそれを選んだ。

落書きは苦手なようで、ずっと長いことかかって、日付しか入れられずにいた。

誕生日まで聞かれたのに…

あいうえおの飾り文字の表とにらめっこしてたのに…

幸山くんは一枚だけ、残りは花が落書きをしてあげた。半目の分ももちろん花が落書きをした。

印刷が終わったら、すぐに半分に切って渡した。

花はなくさないように、幸山くんにもらったおみやげの袋の中にしまった。

## 5 懐かしき家へ・前

そのあとの予定は、花にもなかった。

本当は駅周辺にも考えている場所はあったけれど、あまりにも天気がいいから、幸山くんが昔すんでいたところ「花にとっては今住んでいるところの方がいいかなと考えが変わった。

汽車ではボックス席に並んで座った。窓の外をぼんやりと見ながら、肩が近いな...と思ったりした。着くまでの間、向こうの方言を教えてもらったが、基本的にしゃべらなかった。

おみやげの袋が、線路の起伏があると揺れていた。

毎日朝夕2回見る駅で降りて、外へ出ると、お日様がぼかぼか当たっていた。ありふれた景色なはずなのに、その日だけはいつも以上に美しく見えた。幸山くんは「懐かしい」と言っ、のびのびしているようだった。

「小学校遊びに行く？」

と聞くと、

「あ、俺の昔の家行っている？」

と聞かれた。リクエストがあるのは嬉しい。

「うん、あたしはそっちは分かんないから案内してね。」

駅からの方角は、花の家と真逆だ。普段はショッピングセンターに行くために自転車をとばすときくらいしか通らない。その道を歩くということが新鮮だった。

幸山くんについて歩いてみると、横断歩道の向こうから同じ高校の男子ふたり組が自転車に乗ってきた。しかも隣のクラスの、花が学年で一番かつこいいと思っている人だった。向こうは、まじめそうな花が、私服の男と歩いていることにびっくりしていた。

そりゃそうだよね。

あたしも何でこんなところであんたに会うのか不思議だよ！

ところが、見られても嫌な感じはしなかった。その人にときめくことはなかった。

ローカルなストアの裏に入ると、団地がたくさん連なっている。

そこまで来ると、幸山くんは懐かしそうに「変わってない！。だけど綺麗になってる！！」と言った。

花はもともと知らないから、「ホントだ、普通に綺麗」と、舗装の完璧にされた道路をながめた。

幸山くんは左右を見ながら、どんどん歩いていった。

「もう少し行くと、抜け道があるんだよね。」

自分の住んでいた官舎が見えると、「あれ」と指さしながら、そう教えてくれた。

すごく楽しそうで、花まで嬉しくなった。

幸山君の言う通り、程なく「抜け道」に出た。

といつても、フェンスと植え込みの間の崖みたいな道のことだ。人の足で踏み固められていて、その道のところだけ雑草が生えていない。ちよつとした斜面になっていて、ほかの高校のテニスコートと官舎の駐車場を分ける塀を人が歩いてできたものらしい。幸山くんは慣れたように歩き出した。

「あれは何高？」

「さあ…この辺だったら南が丘じゃないかな。」

「そうだったけ？」

「うん、きつと。」

その崖は少しずつ下がりがりながらも、どこまでも続いていく。どこから駐車場に出るんだろう？

崖から駆け下りたようなあとを見て、さすがにこれはスカートではできないと思っていると、幸山くんがここから降りるんだと言って塀からジャンプした。

降りてから気づいたらしく、「あ、降りれる？」と聞いてきた。

塀のすぐ横に立っている。

少し迷ったけれど、残念ながら降りれるのだ。

「うん」

花は膝を曲げて、スカートのすそをほとんど揺らさないでぱつと降りた。

子どものところからやんちゃなことを重ねてきたので、柵をよじ登ったり高いところから降りたりなど余裕なのだ。

こういうところで、「降りれない」なんて言って、手を取っても  
らう方がかわいい女の子なんだろうな…。あたしも演じるべきだっ  
た？

いや、でもあたしらしくないことはするべきじゃない！

塀から飛び降りると、一気に視界が低くなった。

## 6 懐かしき家へ・後

「この塀こんな小さかったけ？」

幸山くんは塀をしげしげと見つめながら首をかしげた。

「幸山くんがおつきくなっただんでしょ。昔は小さかったもんねー。」

幸山くんはさらに進んでいき、ようやくもともと住んでいた建物に着いた。携帯を取りだして、外観を撮っていた。

なんだか幸山くんがきらきらしているように見えた。

「変わってる？」

「いや、変わってない。」

「あがってみようよ。」

薄暗い階下で、古い郵便受けの表札を見ている幸山くんに声を掛けた。「今は生島さんが住んでる……」などと言っているの、せっかくだしもつと近くに行けばいいかと思ったのだ。

「いいの？」

うなずいて、花の方から階段を上がった。

1階あがるごとに、踊り場から見える景色が変わった。隣の官舎の屋根がどんどん低くなり、空にどんどん近づいている気がした。雲がばかりばかりと浮かんでいて、空は柔らかな青をしている。階段を上がると少し汗ばみそうな、春にしては暑い日だ。

ドアの前に立つと、何と言ったこともないドアだった。

こんなんでも見れてよかったのかな？

少し疑問だったが、今度は幸山くんが先頭で階段を下りて建物を出たとき、「付き合ってくれてありがとう。」と言われた。

そして、通学路を通って小学校へ向かうことにした。

「あれは佐倉ん家だった。」と、いろいろな懐かしい名前の人の家を教えてもらった。

「へえ、こんなところに住んでたんだ」

花はぜんぜん知らなかった。

## 7 小学校

小学校へは、思ったより早く着いた。

「こんなに近かったわけ？」幸山くんはそんなところにも驚いていた。

「俺足短かったもんなー」

花は歩くのは人一倍遅い方だと思うが、そんな花と歩いていても速く感じてしまうものなのだ。小学校低学年の時間は、人生で一番ゆっくりなのかもしれない。

花は、学童保育というものに6年間通っていたので、春休みの間もやっているそこへ顔を出すことにした。その間、幸山くんは校舎を回ってくると言った。

花たちがいたころはできたての新しい学校だったが、今年で創立20周年を迎え、玄関の上の校章から黒い筋が垂れていた。

ふるくなつたなあ。

花も懐かしかった。

学童の挨拶が長引いて、幸山くんを玄関で待たせてしまった。

「ごめん」

謝りながら、校庭や中庭のある方へ向かった。

中庭の真ん中に置かれていたあずまやを見て、写真を撮りたくなつた。どうせならふたりで写りたかった。

その辺で遊んでいる学童の子を捕まえて、「写真撮ってくれない？」とデジカメを渡した。

何人かには怖がられたが、そのうち花の知り合いの子が走ってきて、

撮ってくれることになった。

「なに、花、結婚するー？」

「ひゅーひゅー」

と、初めて古典的なヤジを飛ばされた。まさか2008年の小学生の口から、ひゅーひゅーという言葉が出てくるとは思わなかった。幸山くんは楽しそうに笑っていた。

「花、この人誰？彼氏？」

そう聞かれたときだけ、「県外から遊びに来てくれた人だよ。」と事実を伝えておいた。

「結婚式の写真みたい。」などといわれながらも、無事写真が撮れた。

あとで確認したら、あずまやもその奥の校舎や体育館もきれいに写っていたが、ふたりとも変な顔をしていた。だが、小学生たちはさつさと遊びに戻ってしまい、撮り直しは頼めそうになかった。

「結婚する？」という言葉は、そのあと校庭を抜けて裏口出るまで、ほかに2人にも聞かれた。

そのたび、笑ってすませておいた。

幸山くんは、「そっか、俺らもう結婚できる年だもんな。」とつぶやいた。

「ホントだね。」

そのときはうなずいたが、よく考えてみれば少し違う。  
花は１７歳だからもうできるが、男は１８歳にならないとまだだ。  
まあ、別に細かいことはいいけどね。

## 8 訪問・前

小学校の校庭を出た流れで、今度は花の通学路になった。  
花の案内できる番だ。

「この坂をあがると山本くん家があるんだよ。」

「へー、かっこよくなってるんだろう。」

「うー…ん、そうでもない。」

高校入ってからすぐ付き合ってたけど。」

お別れのバスは5時半発だった。

そのときは3時になるかならないかだったと思うが、時間はまだたつぷりあると感じていた。

そこで、サッカー部のころ仲良かった、幼なじみの家を突然訪問した。

花は記憶が曖昧だったが、幸山くんは昔帰ってきたときにも遊びに来たらしく、家を覚えていた。  
ぴんぼーん。

幸山くんは押しながら、「なんて言えばいい?」ととまどっていた。  
確かに、いきなり名前を言ってもびつくりするだろう。

それでも、スピーカーからおばちゃんの声が聞こえてくると、ちゃんと名前を言っていた。

おばちゃんはびつくり仰天といった感じで、

「今あの子を起こしてくるからね。ちょうど昼寝してたのよ！ちよっと待っててね」

といってプチンと受話器を置いた。

おばちゃんが出てくるまでの間、その家の犬がほえるのをおもしろがった。

蛇口のところに使い古されたサッカーボールが転がっていて、それを見つけた幸山くんは片足でちゃんとつついてリフティングをした。そしてきらつとこつちを見て笑った。

花もふふふと笑った。

おばちゃんはあわてた様子で出てきた。

そして、玄関のドアを開けて、まず見えたのが花の姿だったということに驚いた。

幸山くんが訪ねてきたと思ったら、なぜか花がいるのだ。もちろん花もその家の子と6年間同じクラスだったし、おばちゃんとも知り合いだったが。

「どうして？」

といった表情がありありと見て取れた。

すると幸山くんがさつと前に出て、「お久しぶりです。」とあいさつをした。

おばちゃんは「ああ…ああ。」とうなずきながら、「ひさしぶり。」

と気の抜けた笑顔を見せた。

花も後ろから「私もお久しぶりです。」と言った。

「ああ、ひさしぶり。」

おばちゃんは何回もうなずいた。

## 9 訪問・後

「今日はどうしたの？」

おばちゃんは少し落ち着きを取り戻したようだった。

「ちょっと遊びに来ました。」

「まあ、ひとりで？」

「はい。」

「今日はどこかに泊まっていくの？」

「いや、日帰りなんで。」

「サッカー続けてるんだってね。今は部長さんとかしてるの？」

「いや、そんなすごいことはしてないです。」

幸山くんがおばちゃんの質問攻めに合っている間、花は微笑みながら会話を聞いていた。

まさかあたしに会いに来たとは思ってないんだろうな。

しばらくして、やっと桃井くんが姿を見せた。

本当に寝起きといった様子で、顔半分が赤く、髪の毛くしゃくしゃになっていた。

「おう。」

「おう。」

軽く挨拶をして少し無言になり、桃井くんの方から言った。

「…ひさしぶり。」

「ああ。」

男の子の再会ってこういうものなのかな。

初めて見る気がして、興味津々だった。

すかさず、おばちゃんが「あんたも遊びに行つてきなさいよ。ほら、早く着替えて。」と言つた。

「え…」

桃井くんは心底嫌そうだった。

寝起きの機嫌が悪いのだろう。

「何で？せつかく来てくれたのに何を言つてるのよ。」

「…いい。」

「ほら、行きなさいよ。」

「あ、いいですよ、別に。」

らちがあかないというふうに、幸山くんが止めた。

「あら、そーう…？ごめんね、うちの子ったら。」

うちの子が行かないとふたりがデートみたいになっちゃうじゃないの、ねえ？」

「あ、ホント、いいです。」

幸山くんは失笑していった。

デート、なんだけどな…  
たぶん。

だいぶ空気の読めないおばちゃんがかわいかった。

ということは、桃井くんは読んだんだろうか？

いやいや、ただ単に不機嫌だったただだね。

じゃないとおかしいでしょ。ふつー、なんでおまえらが一緒にいるんだよってことになるでしょ。

最後にふたりで頭を下げて、桃井君にもバイバイを言ってその家  
あとにした。

## 10 花の家

さて、桃井君の家に別れを告げたあと、いよいよすることがなくなつてしまつた。

そもそも幸山くんは、昨日までサッカー部の遠征があつて、その休みとして今日がお休みらしい。それなのに花はこんなに連れ回して、さすがに足を休めた方がいいだろうと思つた。

だが、この近所はただの住宅街で、休めるところがない。

休めるところ……

それはひとつしかなかった。

花の家だ。

ただ、親のいない家に男子を上げるのはダメなのではないか。いくら恋愛経験の低い花でも、それは考えた。

しかし、ほかに休めるところもなく、花自体も足が痛くなつていた。

――幸山くんなら昔遊びに来たこともあるし、ぜんぜん大丈夫。

結局ひとりで心の中で解決して家に案内した。

鍵を開けているとき、幸山くんが

「親は？」

と聞いてきた。

「いないよ。うち、共働きだもん。」

幸山くんが横で心なしかまじめな顔をしている気がして、やっぱり

まずいかなあ…という思いがちらつと頭をかすめたが、気にしないことにした。

「片づいてないかもしれないけど、ちょっとここで待っててね。」  
玄関で待たせておいて、とりあえず見苦しいものを先に片付けて、  
「どうぞ」と言って通した。

掘りごたつに座ってもらい、花はお茶を入れてきた。  
そしてやつとゆっくり座って、いろいろな話をした。

アルバムをもつと持ってきて、中学校の修学旅行の話をしたり、向  
こうの高校生活も聞いた。

文化祭でクラスで映画を撮って、その主役になった話は、メールで  
聞くよりずっと楽しかった。

学年一かわいい子が相手だったらしいが、振られる役回りで、ほか  
の男子が手をつないでいてちょっとうらやましかったこと。

その子が執行部の行うアンケートで、一年生の時「学年一かわいい  
子はだれか」で2位になって怒ったこと。

次の年見事1位になったこと。

サッカー部の友達の話。

仲のいい音大を目指している子の話。

部屋に置いてあるピアノを見て、幸山くんに関か弾いてと頼まれた。

ピアノはどちらかというと苦手科目だ。

だが、下手でもいいと言われて、ピアノの前に座ってしまった。幸山くんは「これは居住まいを正さないといけないな」といって、こちら側を向いて正座した。

「いや、ふつーにしておよ！」

あわてて止めたが、笑っただけだった。

どれにしようか迷って、一番得意な曲を弾くことにした。

チャイコフスキーの「甘い夢」。

何ヶ月ぶりに弾いたが、何とか大きく間違えずに弾き終えることができた。

「おー、すごいじゃん」

といってもらえた。

音大を目指すような子の演奏を聴いている人の前で弾くなんて、もう絶対しないからね、と心に誓ったけれど。

5時半のバスに間に合うような汽車の時間まで、いろいろ話ができた。

この日の中で、一番目を合わせてはなせた時間だっただろう。

掘りこたつの中で、何回か足がぶつかった。

携帯の画像を見るときは、何回か手が触れあった。

だが、それだけだった。

心配するようないことは何も起こらなかった。

## 11 思い出の景色

家は早めに出て、まっすぐ駅に行かずに近くの池により道をした。4時すぎの少し低い太陽を浴びて、池の水面がまぶしく乱反射していた。木でできた、池に浮かぶように突出した船着き場の方へ歩いた。

ふたりで近づくと、その上でくつろいでいたかもが2羽、ばたばたと池に逃げていった。

「すげえ……」

幸山くんが言った。

「うん、きれい。」

船着き場は水鳥のフンでいっぱい、足の運びに注意しないと踏んでしまいそうだった。

その不安定な板の先にたつと、ふたりの重みで板が池に沈み、少し進水してきた。

向こう岸のかすむ山の方からふたりに向かって、黄色い光の筋がつながっていた。

「きれいだなあ」

「写真撮ろう。」

幸山くんは携帯で、花はデジカメで、風景だけを撮った。

きつとこの風景を見たら、君を思い出す。

このまばゆいばかりの池の水面を見て、池からのしめった風を顔に浴びたら、今日の日がよみがえってくる。次来るときは、いやきつとその次だつてまたその次だつて、君を思い出す。

帰りの汽車は、ふたりがけの優先座席にふたりで座った。  
ほとんど何も話さなかった。  
到着駅の時計―再会する直前に私が見上げていた時計は、4時50分を指していた。

「ちょっと時間があるね。」

「どうしようか…」

もうどこでもよかった。

早く5時20分になっちまえーという気持ちと、このまま泊まって  
いつてほしいという思いと、花の方がついて行きたいという無茶な  
願いがあった。

## 12 デート

最後に提案をしたのは幸山くんの方からだった。

「じゃあ、ミスドに行こう。」

「うん。」

花はなるべく元気に返事をした。

今日は一日小学校を巡ったり、家でアルバムを見たり、デートというより幼なじみの再会だった。

だが、ミスドというと、少し今時の高校生のデートらしい。

花の通う高校の近くにあるので、きっと知っている人に見られるけれど、幸山くんの背中について行った。

花の方が先に会計を済ませて、席について待っていた。

その間、3つ先のテーブルに座っているチャラそうな男3人がこっちの方を見て話しているのを感じた。勘違いかもしれないと思ってそっちを見やると、2人と目があった。

とても遠い存在な気がした。

いつもだったらフンツくらい思ってるのに。

大してどうでもよかった。

幸山くんはバスの中で食べる分と、今食べる分と両方買ってきた。カフェでは並んで座り、家では斜めに座り、今は向かい合わせだった。もう恥ずかしくなかった。

テイクアウトの袋をしまうとき、カバンの中に日本史の参考書が見えた。

「日本史？」

と聞くと、

「うん、趣味でやってる。」

とさらりと言われた。

最近やっと授業をまじめに受け始めたって言ってたのに、好きなことはやるんだ…

あたしだったら趣味で参考書とかないわー。

意外な発見をした。

ミスドは久しぶりだったし、たぶんまた来るのはだいぶ先なんだろうな。

そう思いながら、ポNDERINGをひとつずつ丁寧にちぎって、ゆっくり食べた。

## 12 デート（後書き）

次が最終話です。

ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございました。

### 13 さよなら

ミストで時間をつぶし、最後はおみやげを買いに行った。  
お母さんには来るということを言っていなかったらしい。

「じゃあ全く知らないの？」

「ああ」

「！」

「家を出るのが朝早かったから、家には『ちよつと出かけてくる』  
って置き手紙しておいた。」

「すごいね…！それで大丈夫なの？」

「んー、別に大丈夫」

「お金は？」

「お年玉使ってなかったし。それに近いし。」

「ぜんぜん近くないよ！」

バスで5時間もかかるなんて、近いなんて言えないよ！男の子って  
こうなのかと思ひながら、おみやげは絶対あたしが出そうと心に決  
めた。

だが、結局向こうが出してしまった。

さすがにカフェみたいには行かなかった。「ホントいいから」とき  
っぱり言われて、財布に掛けていた手を下ろさざるをえなかった。

部活用のおみやげは見つかったが、お目当てのまんじゅうが売り切  
れていて、3つくらい店を回ったがなかった。

花はそのまんじゅうがその店でしか売っていないことを知っていたが、探している姿を見たら言い出せずに一緒に探しているふりをした。

夏休みに絶対花が会いにつて、そのときは買っていこう。  
今度こそしっかり心に誓った。

バスの予定時刻が迫り、ターミナルに行った。

利用客は少ないようで、そのバスに乗るといった雰囲気の人はこちらほらとしか見えなかった。他の人は皆疲れた顔で、大きな荷物を抱えているのに、幸山くんだけは軽装だった。

バスがホームに来て、ほかのお客さんが乗車券を出している間、ずっと無言だった。

聞きたいことがあった。

―あたしに会いに来たんだよね？  
何で？

そして、バイバイをするまえに、握手をしたかった。

けれども、何もできずにただ突っ立っていた。時刻表の貼ってある柱にもたれて、ひたすらバスの運転手の手元を見ていた。

ついに、幸山くんが短く

「じゃ」

と手を挙げた。

花は目を見開いて、唇をきつと閉じてうなずいた。

何で？という疑問は離れないが、解決できなくてもいい。たぶん、それでいいのだ。

幸山くんが乗車券を見せる番になり、確認が終わってバスに乗る前、「バイバイ」と手を振られた。

花は口を閉じたまま笑顔になって、大きく「うん」と頭を上下に振った。

バスに乗り込んでいく。

薄暗い窓の向こうで、自分の席を探しているのが見える。

バスが発車するまで、その柱のそばを動かさずにずっと立っていた。目が悪いのが悔しかった。

バイバイすら言わなかったのも、悔やまれた。

バスがエンジンを吹かし、ぶるんと車体が揺れた。

そして発車していく。目を大きく開けて、必死に探してみた。すると、後ろの席の方で手を振っている人がいた。花も、齒をむき出しにして、思いつきり手を振った。

バスが進み、花も百貨店のコインロッカーに預けた荷物を取るため、同じ方向に進んだ。

その間、何回も手を振った。

いったん席が分かれれば、表情まで見えなくても大丈夫。  
窓越しの揺れる手に向かって、遠ざかるまで振った。

―何で？

そんなことは分からない。

―でもありがとう、今日は楽しかったよ。

幸山くんのおかげで花は原点巡りをして、懐かしい気持ちになれた。  
―その懐かしい場所が、幸山くんとの思い出だらけになっちゃった。  
幸山くんが帰ったあとも、あたしはひとりそこを歩いて思い出し  
ちやうかもしれないんだよ？

イチワル…

たった一日だけのデートだった。

振り返れば夢を見ていたかのようだ。

けれども、花と幸山くんの並んでいる姿を見て、付き合っていると  
きつと勘違いした男子がいる。たとえ他人の思い過ごしの中でも、ふ

たりが恋人だと思ってくれた人がいるかもしれない。

また、今日のことか夢のまま消えていきそうで怖くなったとき、  
現実だったのだと教えてくれるのは、机の上ある、もらったおみや  
げ。

そして、ふたりで半目になっているプリクラがある。

### 13 さよなら（後書き）

今まで読んでくれてありがとうございました。  
これでおしまいです。

もうお気づきの方もあるかもしれませんが、これは完全ノンフィクションでした。だから、夏に実際に続きをやってきます。

ただ現実よりちょっと恋愛風味を増してみました。

次会ったときは、どうなるのかな。自分でも楽しみです。

では、あたしの初めてのお話におつきあいいただきまして、皆さんの貴重なお時間を割いてくださったこと、本当にありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9506d/>

---

一日だけの恋

2010年11月4日13時27分発行